

令和 4 年 5 月 31 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2021

課題番号：17K04388

研究課題名（和文）叱る側と叱られる側双方の性格特性に着目した叱り方の評価次元の分析と実践活用

研究課題名（英文）An analysis and practical application of the evaluation dimensions of reprimanding: Focusing on the personality traits of both senders and receivers of reprimand

研究代表者

阿部 晋吾（ABE, SHINGO）

関西大学・社会学部・教授

研究者番号：00441098

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、叱り方の評価次元を新たに解明し、性格特性と叱り方および叱りの受けとめ方との関連を新たに解明することであった。一連の質問紙調査を実施し、それを分析した結果、叱りには関係志向、加罰志向、改善志向の3つの評価次元が共通してみられることが明らかとなった。それと同時に、母親はポジティブに叱っているつもりでも、子どもからはネガティブに受け止められやすいといったように、叱る側と叱られる側の立場の違いや、双方の性格特性が叱りの評価に影響していた。また、全般的に関係志向と改善志向の叱りはポジティブな対人的影響、加罰志向の叱りはネガティブな対人的影響につながりやすいことも示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は叱り方やその影響の実態の解明のみにとどまらず、改善にも応用することができる。それぞれの性格に応じた叱り方や、その受けとめ方の特徴が解明されれば、親や教師が自分の叱り方を反省し、より適切なものへと修正するための手がかりになる。本研究の成果をもとにした、自分の叱り方を振り返るチェックリストを用いることで、自分の性格によって叱られる側との間に認識のずれが生じやすい点を確認したり、叱られる側の性格特性に応じて、しつけや指導するときに注意すべき点を確認したりすることができる。このように、学術的成果のみにとどまらず、子育てや生徒指導の指針として、教育実践にも貢献することができる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the present study was to find the evaluation dimensions of reprimanding, and to find relationships between personality traits and the way reprimanding is given and received. The results of a series of questionnaire survey revealed that three evaluation dimensions were commonly observed: relationship-oriented, punishment-oriented, and improvement-oriented. At the same time, the differences in the position of the senders and receivers of reprimand, as well as the personality traits of both parties, influenced the evaluation of reprimanding, as in the case of mothers who thought they were reprimanding positively, but their children tended to perceive it negatively. The results also indicated that, in general, relationship-oriented and improvement-oriented reprimanding tended to lead to positive interpersonal influences, while punishment oriented reprimanding tended to lead to negative interpersonal influences.

研究分野：社会心理学

キーワード：叱り 性格特性 親子関係 教師生徒関係

1. 研究開始当初の背景

多様な個性や価値観を認めようという社会情勢の中で、子育てや教育現場において叱ることが難しくなりつつある。叱りは「個人が不当と認識する行為を相手に指摘し、改善を求める行為」(阿部・太田, 2014)と定義することができる。叱ることは短期的な問題行動の抑制だけでなく、子ども的人格形成、社会化においてきわめて重要な役割を果たしている。しかし、中学生を対象とした調査では、生徒の性格特性によっては、教師の叱りの意図が否定的にとらえられ、生徒の反発、教師-生徒関係の悪化がもたらされることが明らかになっている(阿部・太田, 2014)。どのような親・教師が、どのような子ども・生徒に対して、どのように叱ればよいのか、それぞれの特徴にあわせた対応の解明が、課題として残っている。

阿部・太田(2014)は、教師からの叱りが中学生の援助要請態度に影響すること、また、その影響過程は自己愛傾向という生徒の性格特性によって異なることを新たに解明した。近年、反社会的な性格特性として、Dark Triad(自己愛傾向、マキャベリアニズム、サイコパシー; Paulhus & Williams, 2002)と呼ばれる三つの性格特性が注目されており、自己愛傾向だけでなく、他の二つも、叱り方やその受けとめ方との関連が予測される。

また、叱られる側(子ども=生徒)の性格特性と同時に、叱る側(親および教師)の性格特性の影響についても併せて検討する必要がある。さらに、叱り方についての二者間での評価のずれが、問題行動の改善といった叱りの効果を左右することも考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、教師や親の叱り方を評価するための次元を解明し、性格特性と叱り方、およびその受けとめかたとの関連を検討することである。本研究の特色は親-子のペアデータを用いることで、評価のずれや、それが叱りの効果に及ぼす影響を解明する点にある。具体的には以下の3点を検討する。

(1) 叱り方の評価次元の解明

叱り方にはどのような評価次元があるかを解明し、親・教師、子ども・生徒のそれぞれの立場から評価することのできる、測定尺度を開発する。

(2) 叱り方と性格特性との関連の解明

叱る側と叱られる側それぞれの Dark Triad(自己愛傾向、マキャベリアニズム、サイコパシー)を測定し、叱り方やその受けとめ方との関連を明らかにする。

(3) 叱る側と叱られる側の評価のずれと、それが叱りの効果に及ぼす影響の解明

親-子ペアデータを用いた分析を行い、一方の性格だけでなく、その組み合わせが叱りにもたらす効果を解明する。

3. 研究の方法

(1) 調査 -

調査 - では、親子ペアデータを取得し、叱り方の評価次元に関する項目の吟味と、性格特性との関連性を検討するための質問紙調査を実施した。

対象者と実施方法 2018年10月に、Web上で調査を実施した。中学生(1年生男78名、女73名、2年生男73名、女64名、3年生男66名、女63名)とその母親、計417組の有効回答を得た。

質問項目 叱りの評価: これまでに国内で発表されている叱りに関する研究をレビューし、整理統合して全36項目を作成した。ふだんどのように子どもを叱るか(母親への質問)、また母親から叱られるか(子どもへの質問)について尋ね、選択肢は“1.あてはまらない”から“5.あてはまる”までの5件法で回答を求めた。Dark Triad: 日本語版 Dark Triad Dirty Dozen(田村他, 2015)を使用した。選択肢は“1.全くあてはまらない”から“5.非常にあてはまる”までの5件法である。叱りの対人的効果: 叱られた後の問題行動の改善1項目(“1.前よりもするようになる”から“5.前よりもしなくなる”までの5件法)、および母子関係の変化1項目(“1.前よりも悪くなる”から“5.前よりも良くなる”までの5件法)を使用した(いずれも阿部・太田, 2014を参考に作成)。なお、いずれの設問も母子双方に回答を求めた。

(2) 調査 -

調査 - では、小・中学生の子をもつ教師を対象に質問紙調査を実施し、自分の子どもに対する叱り方と、教師として生徒に対する叱り方の両方について回答を求めることで、それぞれの立場によって叱りの評価次元の構造や、その水準に差異がみられるかを検討することを目的とした。

対象者と実施方法 2019年12月にWeb上で調査を実施した。小・中学生の子をもつ教師(幼・小・中・高・大学の教員だけでなく、塾・予備校講師等も含む)500名の回答を得た。そのうち、用意した複数のDQS(三浦・小林, 2018)を遵守した430名(うち女性222名)を分析対象とした。

質問項目 立場(親としてか教師としてか)に合わせて一部表現を修正したが、調査 - と同じ内容の項目を使用した。

(3) 調査

調査では、親や教師以外から叱られた経験も含めて中学生を対象に質問紙調査を実施し、叱り方の評価次元を改めて検討した。また、回答形式を変更しても(リッカート形式から複数選択形式での2値データに変更)、評価次元の構造が再現されるかについても併せて検討した。

対象者と実施方法 2021年11月にWeb上で実施し、中学生300名(各学年男女50名ずつ)から回答を得た。

質問項目 叱られる相手：阿部(2002)を参考に、ふだん一番よく叱られる相手について、「先生」「親」「兄・姉」「先輩」などの選択肢から、その相手の性別とともに回答を求めた。叱り方の評価：その相手からふだんどのように叱られることが多いかについて、調査 - の36項目を使用した。ただし、2件法(あてはまるかを選択/非選択)の複数選択形式で行った。具体的には、対象者ごとに36項目をランダム順に提示した上で「少しでもあてはまるものも含めて、できるだけ多く」選択するように回答を求めた。

4. 研究成果

(1) 調査 -

叱りの評価の構造の検討 母親データ、子データそれぞれについて探索的因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行った。その結果、母子ともに3因子構造が妥当であると判断した。36項目中2項目において母子間で最も高く負荷する因子に違いがみられたが、それ以外は概ね同様の因子構造であった。それぞれの因子は、「しかる理由を示して」「今後のことを考えて」など、叱りによって子どもの行動の変容をねらいとする「改善志向」因子、「あたたかく」「良いところを認めながら」など、叱られる子ども自身やその子どもとの関係への配慮がうかがえる「関係志向」因子、「乱暴な言葉で」「罰を与えながら」など、叱りかたそのものに罰の要素が含まれるものや罰を与えることを目的とした「加罰志向」因子と命名した。

次に、伊藤(2018)を参考にして確認的因子分析を用いて項目の選定を行った。具体的には、母データと子データそれぞれに対して、探索的因子分析で示された負荷量の最も高い因子からのパスを各項目にそれぞれ設定したモデルを初期モデルとしたうえで、因子からのパス係数、LM検定およびWald検定の2値、項目間の誤差相関をもとに項目を1つずつ除去していった。その結果、母データと子データで一致しない残存項目がみられたため、比較検討のためにこれらの項目も削除したところ、25項目が最終的に残った(Table 1参照)。

Table 1 叱りの評価の各因子に含まれる項目

関係志向	加罰志向	改善志向
あたたかく	乱暴な言葉で	真剣に
良いところを認めながら	大声で	はっきりした言葉で
冷静に	厳しい言葉で	しかる理由を示して
言い分を聞きながら	つきはなして	今後のことを考えて
今回のことだけにしぼって	一方的に	きちんと
	罰を与えながら	的確に
	長い時間をかけて	どうすればよいか示して
	他の人と比べながら	自分で正すことを求めて
	上下関係をはっきりさせて	説得するように
	性格や態度全体について	
	前にしたことも含めて	

母子間でのDark Triad、叱りの評価、対人的効果の差 母子間での差異を検討するために、対応のあるt検定を行った。その結果、Dark Triadについては有意な母子差はみられなかったが、叱りの評価については、母親は子どもよりも、自分の叱りの関係志向と改善志向を高く評価しやすく、加罰志向を低く評価しやすいことが明らかとなった($t_s(416) > 7.66$, $ps < .001$, $d_s > .26$) (Figure 1)。なお、行動改善、関係変化には有意な母子差はみられなかった。

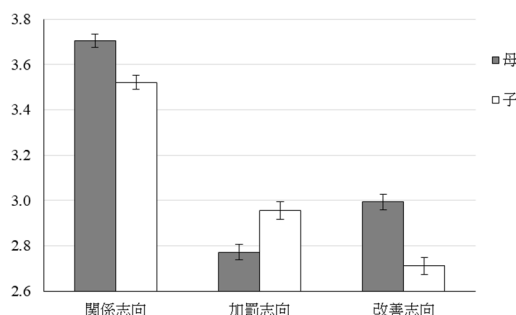
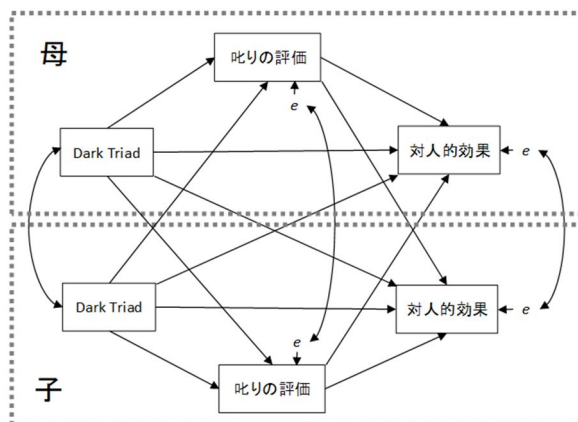


Figure 1 叱りの評価の各因子の母子の差

Dark Triad が叱りの評価と対人的効果に及ぼす影響 構造方程式モデリングによる APIM(Actor-Partner Interdependence model)を行った(Figure 2)。なお、母子それぞれの Dark Triad、叱り評価の各 3 因子、対人的効果の間には共分散も設定した上で分析を行った。



注)実際の分析ではDark Triadおよび叱りの評価は複数の因子に分かれ、対人的効果も行動改善と関係変化があるため、それぞれの間にも共分散を設定。

Figure 2 Dark Triad が叱りの評価と対人的効果に及ぼす影響のモデル図

まず Dark Triad から叱りの評価への影響について検討する。母子いずれからの視点においても有意な関連がみられたのは以下の通りであった。母親のサイコパシーは関係志向と改善志向に負の関連がみられ、母親の自己愛傾向は改善志向と加罰志向に正の関連がみられた。子のサイコパシーと自己愛傾向は加罰志向に正の関連がみられた。次に母子いずれかの視点においてのみ有意な関連がみられたものを示す。母親の視点においてのみ、母親のマキャベリアニズムは関係志向と正の関連が、また母親のサイコパシーは加罰志向に正の関連がみられた。子の視点においてのみ、子のサイコパシーは改善志向と関係志向に対して負の関連がみられた。

次に、Dark Triad・叱りから対人的効果への影響について検討する。母子いずれからの視点においても有意な関連がみられたのは以下の通りであった。子の改善志向は行動改善に正の関連がみられた。また子の加罰志向は関係変化に負の関連がみられた一方で、子の改善志向は関係変化に正の関連がみられた。次に母子いずれかの視点においてのみ有意な関連がみられたものを示す。母親の視点においてのみ、母親の自己愛傾向は行動改善に正の関連がみられた一方で、母親の加罰志向は行動改善に負の関連がみられた。また、母親のサイコパシーは関係変化に負の関連がみられ、子の自己愛傾向も関係変化に負の関連がみられた。子の視点においてのみ、子のサイコパシーは行動改善に負の関連がみられた。

(2) 調査 -

叱りの評価の構造の検討 調査 - と同様に因子分析を行ったところ、叱りの評価には親子間だけでなく教師生徒間での叱りにおいてもおおむね共通した因子構造がみられ、同一の項目を用いての比較検討が可能であることが明らかとなった。

叱りの評価の差 叱りの対象による各因子の水準の差異を検討するために、小・中学校の教師のみ(n = 92)をデータから抽出し、対応のある t 検定を行った(Figure3)。その結果、対子どもの場合是对生徒の場合よりも、自分の叱りの関係志向と改善志向を低く評価しやすく、加罰志向を高く評価しやすかった($t_s(91) > 3.80, p_s < .001, d_s > .29$)。つまり、同一人物でも、教師として生徒を叱る場合は、親として子を叱る場合よりも望ましい叱り方を意識していることも示唆された。

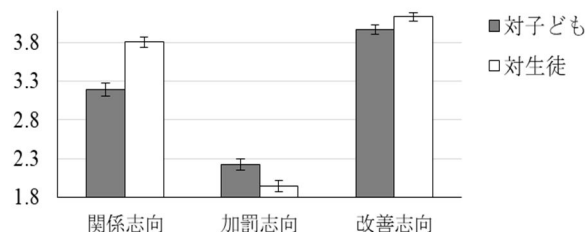


Figure 3 叱りの評価の各因子の対子ども・対生徒での差

Dark Triad が叱りの評価と対人的効果に及ぼす影響 Figure4 で示した要因間の関連に従って、構造方程式モデリングによるパス解析を行った。その結果、Dark Triad のうちマキャベリアニズム、サイコパシーは改善志向および関係志向の叱りとは負の、加罰志向とは正の関連にあることが明らかとなり、この関連性は教師としての叱りにおいて顕著であった。また改善志向は教師としても親としての叱りにおいても行動改善および関係変化にポジティブに関連することが明らかとなった。

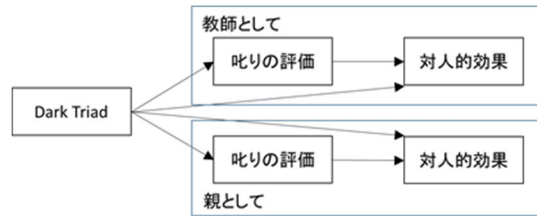


Figure 4 Dark Triad が叱りの評価と対人的効果に及ぼす影響のモデル図

(3) 調査

叱られる相手の分布 ぶだん一番よく叱られる相手は、母親が最も多く半数以上を占め (52.4%)、次いで父親(23.5%)、先生(15.6%)となり、それ以外の回答は 10%未満であった。

叱りの評価の構造の検討 多次元尺度構成法によって項目間の(非)類似性の検討を行った。2次元解を採用し、クラスタ分析によって類似した項目同士をグループ化した (Figure 5)。分析の結果、調査 - で得られた 3 因子構造とほぼ一致する 3 つのクラスタが得られ、同様の構造が確認された。ただし、調査 - では叱られる側である中学生の回答においても関係志向の尺度得点(5 件法の項目得点の平均)が加罰志向の尺度得点よりも高かったのに対して、本研究では加罰志向に含まれる項目の選択率が全般的に高く(「厳しい言葉で(35.3%)」「大声で(32.3%)」など)、関係志向に含まれる項目の選択率は全般的に低かった(「あたたかく(5.0%)」「優しく(6.0%)」など)。調査 - と対象をそろえるために、叱られる相手が母親のデータのみを抽出した場合でもこの傾向は変わらず、サンプリングの方法の違い(母子ペアデータか中学生のみか)が結果に影響を及ぼしている可能性が示唆された。

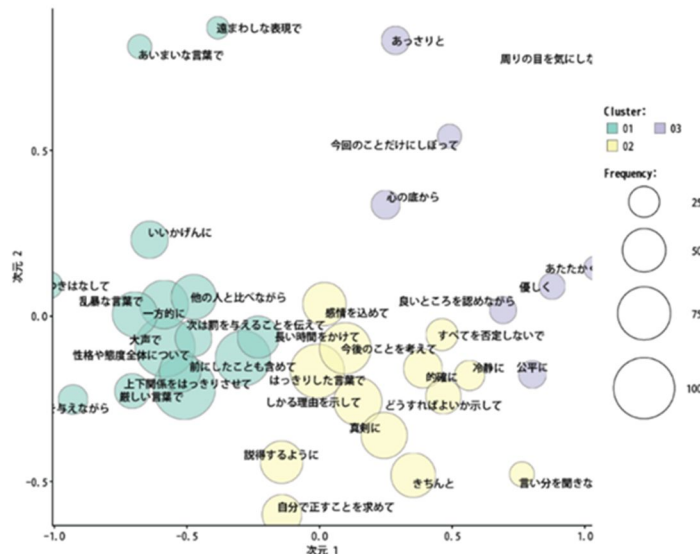


Figure 5 多次元尺度構成法による叱り方の評価の布置

以上の結果をまとめると、叱りには関係志向、加罰志向、改善志向の 3 つの評価次元がみられることが明らかとなった。これは母子間においても(調査 -)、また親と教師それぞれの立場であっても(調査 -)、さらに母親や教師以外の対象から叱られる場合を含めても(調査 -)、おおむね共通した構造がみられ、同一の項目を用いての比較検討が可能であることが明らかとなった。それと同時に、母親はポジティブに叱っているつもりでも、子どもからはネガティブに受け止められやすいといったように、叱る側と叱られる側の認識のずれも明らかとなった。

さらに、双方のパーソナリティが叱りの評価に影響していた。例えば、母のサイコパシーは関係志向と改善志向に負、母の自己愛傾向は加罰志向と改善志向に正の影響を及ぼすのに対して、子のサイコパシーと自己愛傾向は加罰志向に正の影響を及ぼしていた。そして、全般的に関係志向、改善志向はポジティブな対人的影響、加罰志向はネガティブな対人的影響につながりやすいことも示された。

本研究の意義は、叱りの評価次元を解明し、またその影響過程についても明らかにしたことである。さらに、叱る側、叱られる側の立場による違いや、個人特性による違いを明らかにしたことが挙げられる。これらの研究知見は、叱り方の予防教育・改善・トレーニングにもつなげることが可能である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 阿部晋吾
2. 発表標題 親として叱るとき，教師として叱るとき：小・中学生の子をもつ教師を対象とした叱り方の評価次元の検討
3. 学会等名 日本教育心理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 阿部晋吾
2. 発表標題 Dark Triadが叱りの評価と对人的効果に及ぼす影響：教師と親の立場からの検討
3. 学会等名 日本社会心理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 阿部晋吾
2. 発表標題 叱りの評価次元の解明
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 阿部晋吾
2. 発表標題 Dark Triadが母子間での叱りの評価に及ぼす影響
3. 学会等名 日本教育心理学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 阿部晋吾
2. 発表標題 叱りの对人的効果
3. 学会等名 日本社会心理学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関